仙台大学紀要
1999, Vol. 30, No. 2, pp. 61-71

1920年代の実業教育と地域社会
――群馬県桐生地方の修養主義に関する一考察――

坂 根 治 美

Technical education and local industry in the 1920s
――A study of Shuyoshugi in Kiryu, Gunma prefecture――

Osami Sakane

Kiryu Koto Kogyo Gakko Fuzoku Kogyo Hoshu Gakko was established in 1921 (Taisho 10) as 2 years' night school mainly for factory hands in Kiryu textile industry. Prior to the establishment of this school, the importance of Shuyo (cultivation of character) of the factory hands for economic development was often claimed in the articles of a local magazine.

Five councilors of this school who taught 'business common sense' were the mainstays of Kiryu textile industry. Three of them were graduates of Tokyo Koto Kogyo Gakko and they played important roles in the Shuyoshugi education in their own companies.

Hirotaro Nishida, the schoolmaster of this school, had close cooperation with the Kiryu textile circles and he was discontented with the economic condition of Kiryu textile industry. So he encouraged the students to cultivate their character and to get ahead in the world and to develop the Kiryu textile industry, and almost all of the graduates of this school continued to work within Kiryu district. Thus this school functioned as a route of introduction and expansion of Shuyoshugi in Kiryu district.

Key words: technical education, Shuyoshugi, local industry, local leaders, modern Japan

1. 課題の設定

明治末期のアノミー状況の中で登場してきた修養主義は，その代表的位置にある蓮沼門三の修養団の目的が，「① 自己の修養につとめ，人格の向上をはかり，② 相呼応して精神的教育を行い，③ 教育界を革正し，現社会を改善する」[1] ことであったという点にみられるように，基本的には人格の向上をめざす人格主義であったといわれている[2]。

筆者はこれまで群馬県桐生地方への修養主義の浸透を東京高等工業学校卒業生の役割に注目して分析してきたが[3]，本論ではそうした同地方への修養主義の浸透において一つの具体的なルートとなったと考えられる桐生高等工業学校附属工業補習学校に注目し，桐生地方の産業界の動向との関係で同校における教育がどのような機能を果たしたのかを考察することを課題としている。同校は大正10年に創設され昭和20年まで存続するが，本論では修養主義が「錬成」概念に押し込まれるまでの状況を対象とし（具体的にはいわゆる十五年戦争が始まる昭和6年までを扱う），その期間における桐生機業界にとっての同校の教育の意味を検討することになる。

2. 桐生高等工業学校附属工業補習学校創設の背景

(1) 附属工業補習学校創設と桐生地方の織物産業

大正5年4月に桐生高等工業学校（以下桐生高工と略記）の前身の桐生高等染織学校（大正4年12月～大正8年12月 以下桐生高染と略記）は第一回の入学生を迎えるが，同校の開校の犠牲となるかたちで廃止された県立桐生織物学校(明治29年4月～大正2年3月 明治33年3月までは町立）に代わる中等程度の技術者養成機関設置への地元織物関係者の要望を受けて，桐生高染初代校長の遺志を受け継いだ第二代校長西田博太郎が地元の協力のもとに計画を進めて大正10年4月に色染科，紡織科，応用化学科(昭和3年に織物化学科と変更)，機械科の4科からなる夜間の2年制の学校として設立されたのが附属工業補習学校である。同校は，やはり地元の要請を受けて大正12年3月には商業科を増設して附属商工補習学校と改称し，大正15年4月にはさらに附属商工専修学校と改称して昭和20年3月まで存続している[4]。

同校創立の経緯に関しては第一期生の肥塚秀雄（大正12年機械科卒業 群馬県出身）の次のような記述がある。

> 本校（附属工業補修学校の母体である桐生高工：引用者註）の卒業生は全国より集っている関係上，卒業すると他都市へ就職して仕舞うので，桐生市の土地産業の進歩発展のためにはならないと言う理由で，夜間部ならば市内の徒弟が主なので卒業しても土地産業につながると言う訳で，西田前校長を初め地元有力者の猛烈な運動があって文部省でも認可したものと聞いております[5]。

当時，官立高工の附属としてこうしたレベルの学校を設置したのは同校だけであったが[6]，このことも上記のような地元の期待の大きさを証明するものであろう。

さて，同校は商工補習学校時代の学校規程に「本校ハ小学校ノ教科ヲ卒ヘ商業又ハ工業ニ従事スル者ニ対シ商業又ハ工業ニ関スル知識技能ヲ授クルト共ニ国民生活ニ必須ナル教育ヲ為スヲ以テ目的トス」[7] とあるような目的を持つ学校であったが，大正12年の165名の在校生(聴講生9名を含む）の県別をみると，第一位の群馬県が116名,第二位の栃木県が19名とほとんどが県内の生徒であり，また，在校生の職業をみると機織業27名，機織職工25名，染色職工14名が上位を占め，その他織物関係の職業を持つ者が大半であった（無職は15名)[8]。

その中の一人,色染科第二期生の木村竹雄(大正13年卒業 群馬県出身）は当時の附属補習学校と自身の関係を次のように語っている。

> その頃の私は小さな機屋の倅で昼は仕事と取っ組み夜は学問と取っ組み，夜の勉強は昼の仕事に活かし昼の仕事は夜の勉強に活かし命がけであった[9]。

附属補習学校が果たした具体的な機能をとらえるうえで重要な事例であると考えられる。

ところで，こうした地元の要請を背景として設立された同校では「実業常識」という授業も行われることになるが，その教員として5人の桐生の有力な織物関係者が招かれている。前原悠一郎(日本絹撚株式会社社長),金子竹太郎(両毛整織株式会社社長)，前原準一郎(桐生機械株式会社専務取締役)，江原辰之助(桐生織物同業組合副組長)，書上文左衛門(株式会社書上商店社長）がその5人である[10]。このうち前原悠一郎，金子竹太郎，前原準一郎の3人はいずれも東京高等工業学校（或いはその前身の東京工業学校 以下東京（高）工と略記）の卒業生で，出身地の桐生へ戻り，桐生織物学校の教員を経てそれぞれ近代桐生の3つの代表的企業の経営者となっている人物である。彼らは修養団の草創期の功労者とされる手島精一が校長を務めてい

た時代に東京（高）工で学び，桐生への環流後は地方雑誌の発行者，論説者ならびにそれぞれが経営する企業内における教育の実践者として修養主義思想の桐生地方への浸透に大きな役割を果たした人物である[11]。さらに，江原辰之助，書上文左衛門はいずれも東京高等商業学校の卒業生で，上記の3人が重要な位置を占めていた桐生地方高学歴者の団体である「無名會」の会員であって（江原は上述の3人とともに同会の発起者の一人）[12]，書上文左衛門経営の書上商店（織物買次商）が発行する『書上タイムス』誌上においては上記3人が積極的に論説を展開している関係にもあり，また書上は附属工業補習学校に商業科設置を慫慂した桐生の商業家の代表的人物でもあった[13]。

当時の桐生地方は高等教育修了者がその地位を確立しつつある時期であったといえるが，この5人はいずれもそうした高学歴者であり，地元有力者を網羅する「桐生懇和會」時代からの「桐生倶楽部」への所属（江原を除く），職業上の地位，税金額[14]等から桐生織物産業界の中枢を担う人達であったと位置づけることができる。そして彼等は全員が附属工業補習学校の評議委員にも就任しているのである[15]。

ところで，彼等の所属する無名会は，大正6年に開校した桐生中学校創設運動において重要な役割を果たした団体であるが，その運動中でも彼等は中心的な役割を担っている。同会の議事録である『無名會記録』に中学校設立問題の記述が最初に出てくるのは大正3年5月21日であるが，のちの附属工業補習学校評議委員江原辰之助は，その日「吾桐生町ノ如キ工業ヲ以テ主眼トスル土地ニ於テハ矢張実業学校設立ノ利益ナルヲ述」べ，「他日参考ノ為資料ヲ」提供している[16]。桐生の産業ということを考慮して実業学校創設を望む江原の意見は無名会でも考慮されることになり，「中學校設立調査委員」，「實業學校設立調査委員」4名ずつを選挙しているが，後者委員として江原のほかにのちの附属工業補習学校評議委員の金子竹太郎，前原悠一郎が選ばれ，以後，運動の展開とともに設けられた「實行委員」（中学校・実業学校の両設立調査委員8名が留任），「進行委員」（前原悠一郎，金子竹太郎ほか計6名），「既成同盟会委員」（前原準一郎，江原辰之助ほか無名会から計6名）などにも彼等が就任している[17]。さらに金子竹太郎，前原悠一郎，江原辰之助の3人は創立後の桐生中学校の商議員（計10名）でもあったのである[18]。

このように彼等は実業学校をも意識しながら中等学校の桐生への設置を希望し，実際には「中学校」として開設された桐生中学校創設において重要な役割を果たしている。附属工業補習学校はこうした人物を評議委員ならびに「実業常識」の授業担当者として迎えているのである。同校の教育の性格を考える上でこうした点をおさえておく必要があろう。

(2) 『書上タイムス』における職工教育論

職工・徒弟教育を目的とする附属工業補習学校設立に至るまでの時期において，桐生地方では職工・徒弟をめぐってどのような議論が展開されていたのだろうか。ここでは前述のように附属工業補習学校評議委員となる書上文左衛門の経営する書上商店発行の月刊誌『書上タイムス』に掲載された論説のうち，特に附属補習学校の教育に関連する論説に注目してみたい。

両野機業界の発展を目的として明治44年1月に創刊された『書上タイムス』[19]では明治45年に他産地との価格競争に優位を占めるため，「生産費減少論」というシリーズで「斯業先覚者」の意見を掲載している。その第一回として，のちの附属工業補習学校評議委員金子竹太郎の「先づ職工問題を解決せよ」が掲載されているが，金子は，福井，金沢等の他機業地と比較して地元の職工を得るのが困難な桐生において善良な職工を集めることがいかに生産費減少にとってそして他産地との競争に堪えるために重要であるかを論じ，低家賃の住宅の提供，購買組合の設置等の職工優遇策の必要性を主張して

いる[20]。第二回の「桐生の地は機業に不適當也」においてのちの附属工業補習学校評議委員の前原悠一郎も，気候，物価，職工に関して桐生が不利であることをふまえて，職工問題については職工待遇策として金子と同様の方法を考慮することを主張している[21]。この時期の桐生の代表的機業関係者によって同地の機業の発展にとって良職工を確保するということの重要性が強く指摘されていたのである。金子竹太郎の経営する両毛整織株式会社ではのちに修養団の支部が結成され，一方，前原悠一郎の経営する桐生撚糸株式会社（大正7年より日本絹撚株式会社）でものちに「修養會」が設立されるなど両社では修養主義に基づく従業員の教育が展開されることになる[22]。

『書上タイムス』の大正5年12月号と大正6年1月号には，開設された桐生高染の生徒監で修身科担当の若槻道隆の「生産に關する道徳（上）（下）」が掲載されているが，ここで若槻は，新聞雑誌に散見される粗製濫造，不正品の売り込みといった問題をとりあげ，ややもすれば目前の利益に幻惑される我が国の産業界のこうした現状は一国産業の興廃に関してゆゆしい問題であるとして，企業家および職工徒弟等の公徳心の一段の向上（他人に対して迷惑をかけぬようにする，自分の私利のみを計らず社会公衆の為を思う，自分の尽くすべき義務は他人の見ると見ざるとに関わらず必ず遂行する）を主張しているのである[23]。

こうした論説が展開されたのちに，大正6年6月号では「徒弟教育の急を促す」という職工・徒弟教育問題そのものを主題とした論説が掲載されることになる。その著者は，日本製の商品が海外において信用を失墜している粗製濫造ぶりを紹介しながら徒弟教育の重要性を主張し，特に職工の確固たる良心と熟練堪能なる手腕が工業に及ぼす影響の大きいことを指摘している。具体的な教育方法として当面は工場主が時間を割いて織物の性質や原料に関する知識等を教えることを主張しているのであるが[24]，この論説中に次のような部分があることに注目したい。

> 翻つて我兩毛地方，殊に桐生町の實際に照して，痛切に此の職工教育，徒弟たり中等階級たる，實際家の養成に缺陥を示して居ると思ふ。足利にせよ，伊勢崎にせよ工業學校ありて，よく此實際的階級の要求を幾分なりとも，充たしつゝあるといふ事實は茲に一二年以來兩者の發展が，證明しつゝ有ると云ふ状況ではなからうか。近時舊織物學校出身者の，需要が急となり相場が上つたとかいふ奇警な話を，度々耳にするが，こは這般の道理と合致するとまでは行かずとも，少くとも沒交渉なりとは云はれまい幸ひに，中學校の成るありて，稍々此の缺陥を補ひ得べしとするも，こは直接に職工徒弟と交渉するものに在らず[25]

近隣の機業地足利，伊勢崎の発展を工業学校の存在と結びつけてとらえているこの論説は，桐生における同種の学校の必要性を暗に意図したものと考えることができよう。

翌月の大正6年7月号においてはのちの附属工業補習学校評議委員前原準一郎が，自らの経営する桐生機械株式会社（織物関係機械等の製造会社）における職工に対する指導について次のように語っている。

> （前略）機械製造業，我が國に起りしは日尚ほ淺きを以て職工拂底にして勢ひ統御に困難なき能はず，加ふるに從業者個々の頭脳を費すこと多き事業なるを以て職工訓練は最も必要なりとす，由て不肖は成るべく職工に接近して，專問的知識の指導誘掖に努め傍ら品性の向上を計らんとし自らも素行を愼みつゝある（後略）[26]

前述のように近代日本の修養主義は人格の修養・向上をめざす人格主義であったが，刊行された多数の修養書においては「人格」とともに

「品性」と言う言葉も使用されている[27]。先に触れたように前原準一郎は明治期においても修養主義的論説を桐生の地方雑誌に展開していた人物であるが，大正初期のこの時期に実際に職工の品性の向上を図るというかたちで自らの会社の経営にあたっていたことが注目されるのである。

さて，翌大正7年には工業の健全な発達を図ることを目的とした「群馬縣工業談話會」が設置されるが，そこでも職工問題が重要な位置を占めることになる。大正9年1月に開催された同会の総会でも職工問題が協議されているが，この問題については桐生支部が最も徹底的研究をしているとして同支部の意見が『書上タイムス』に掲載されている。そのうち職工優遇策として以下のような主張がみられるのである。

> 職工優待の本義は各工場主に於て職工保健衛生に關する施設を完備し健康増進の實を擧げ勞働時間の短縮に依る餘裕を以て休養を與ふると同時に精神修養の機會を得せしめ以て職工人格の向上を計り自覺ある勞働の下に其収入を増加せしめ一は職工自身の生活を改善し從つて國家生産能率を増進せしむるに在り[28]

群馬県工業談話会は時の大芝知事の主唱によって設立され，知事自身が会長を務めている組織であるが[29]，このように基本的には国家主義的な立場に立つ同会の桐生支部は国家の生産能率の増進のために職工の精神修養による人格の向上の必要性を指摘しているのである。

こうした論説が展開された状況を経て，附属工業補習学校は大正10年に開校することになるのであるが，同校は桐生市および桐生織物同業組合から資金援助を受けることになる[30]。そうしたことからも地元産業界において展開されたこうした職工教育論は同校の教育を考える上で重要となろう。

3. 西田博太郎校長の教育理念

桐生高工は「官立西田塾」と呼ばれるほどに，異例の長期間に亘って校長を務めた西田博太郎（校長在職は桐生高染時代の大正7年から昭和20年まで）の影響力の強い学校であったが[31]，ここで西田校長の附属補習学校に関する教育理念について考察しておきたい。

西田は附属工業補習学校が開設された大正10年の9月に「工業補習教育改善私議」という論説を発表している。そのなかで彼は，欧米諸国の列に互すためには「量より質」の教育を目指すべきであり，補習教育の徹底をはかることが緊要事項であるとして，特に工業補習教育について五項目の希望を述べている。その第一項として重要視しているのが「一に人格，二に体力而して三に技巧」ということであり，「国家工業の前途を想い正義の途に従て永遠に国利を慮る意志鞏固の人格者を要するのである。等しく成金風の軽薄にして非国民的なる実業家に阿附し，其の不徳行為を迎合するが如き人物は絶対に排斥すべきである。（中略）粗製品として従来定評ある我国の工業界こそ，今後は其中堅に斯る堅実にして勇敢なる技術者を要求すべきである。」と主張している[32]。官立学校の校長である西田が国家主義的な教育観を持つことは当然であるが，国利のために必要な技術者として意志強固で堅実な人格者を求めていること，技巧よりも人格を重要と位置づけていることが彼の基本的立場として注目されるのである。

では実際に附属補習学校においては西田はどのような理念で教育を行ったのだろうか。

紡織科第二期生の松井善作（大正13年卒業群馬県出身）が，西田校長から「桐生のために働く重要な人間になることを期待している」，「機業の中堅幹部になるためには真剣でやりなさい」，「桐生の織物業のためにやってくれ」と励まされたと述べている[33]ように，地元桐生の織物産業の中堅を担う人材養成ということを校長は意図していたことになるが，この点に関し

て西田は大正15年の卒業式では次のように語っている。

特に補習學校の卒業者に望むが近來桐生の産業状態は一時的光明を見た様なれども動(やや)もすれば他地方に劣る大勢が見へる事を遺憾とします，(中略)一意專心眞劍に働いて桐生の産業を起さねばならぬ[34]

附属補習学校卒業生に対する西田の期待の背景にはこうした桐生の産業の状態があったのである。さらに西田の次のような訓示にも注目したい。

本校では單に学問計(ママ)りを教へるのではなく皆さんの人格を向上させ様と力めるのであります，桐生の土地にはエライ先輩や實業家も多いのですが，中には人格の案外下劣なる人もあります，然し今後苟も桐生商工業の中堅となり責任を負ふて行こうと云ふ人は人格がよくなくては人の上には立てません，何事も自ら修養し，人の世話には成らぬ様，人の厄介人の迷惑をよく考へて，立派な人物になるべき修養も此處でしなければなりません[35]。

ここに西田の修養主義的教育理念が端的に表れていると考えられるが，この訓示において特に注目したいのは,「桐生商工業の中堅となり」,「人の上に（は）立」つという部分である。この訓示の前の部分では,「將來の成効を見ねばなりません」あるいは「エラク出世して貰いたいと思ひます」とも語られているが[36]，このように「出世」を積極的に肯定する西田の立場は次の部分にも明らかに読みとれよう。

本校の卒業生は皆夫々評判がよいのですが更に今回母校たる桐生高等工業學校の選科へ入つた人があります即ち夜學を二年やつて，母校の選科に入り三年すれば高工の修業生となり得るのでありますし更に卒業生ともなり得るのであります。(ママ)から皆さんの考へ次第では幾らでもエラク進んで行けるのであります自ら駄目だと卑下するのが一番よくないのであります，大に奮發して眞面目に勉強せねばなりません[37]。

筒井は修養主義思想を類型化しているが，西田のこの考え方は筒井のいう「修養手段化型」に近いものと考えてよいだろう。「修養」それ自体が目的でもありながら，「成功」という目的のための手段にもなっている型が「修養手段化型」であるが[38]，「附属補習学校卒業生」→「高工の修業生」→「高工の卒業生」という西田の推奨する上昇ルートは，いわゆる「藤吉郎主義」[39] の学校版である。

西田はこのようにして生徒たちを激励し，同校の卒業生からはのちに多くの「成功者」が輩出されることになるのである[40]。

4.　桐生高工における修養団活動

このような西田校長の理念のもとに教育が展開された附属補習学校であったが，西田の修養主義的教育理念は学校への修養団活動の導入というかたちで具体化されている。

桐生高工においては大正15年1月17日に修養団支部の発会式が行われ[41]，以後しばしば修養団関係の催しが開催されている。『桐生高工時報』では，講習会（昭和2年6月18日～19日），一夜講習会（昭和2年11月12日～13日），講演会（昭和3年12月3日），例会（昭和4年5月1日），一夜講習会（昭和4年5月4日～5日），講演会（昭和4年5月16日）などの開催が報じられている[42]。また，『桐生高工時報』の昭和3年9月号に掲載された「修養團に就て」というA4版ほぼ1頁大の記事において，修養団の起源，現状，主義等が紹介されている[43]。このように桐生高工においては修養団活動が積極的に展開されているが，これらの記事にはこうした活動において西田校長が率先垂範というかたちで

参加している様子も示されているのである[44]。

さらに，桐生高工には「修養」を目的とした団体が他にも設立されている。大正10年創設の「求道會」は仏教を研究することによる精神修養を目的としていたが，その有志会員によって組織された「芙蓉寮」は修養団の趣旨を実行しており，前述の修養団支部発会式にあたっては芙蓉寮の学生2人が司会を務め，修養団支部の事務は芙蓉寮解散（のちの昭和8年）までは同寮で処理されていた[45]。その求道会では斯道の大家を招いての講演会をしばしば開催して会員以外の在校生にも聴講させていたが，その講師として最も頻繁に招き，10回近くに及んだのが暁烏敏であった[46]。明治後期に登場し始めた修養主義者の代表者として清沢満之がいるが，暁烏は，その清沢が明治33年から東京本郷に拠点を設けて浄土真宗系の精神主義運動を展開した同志の一人であった[47]。桐生高工ではその修養団活動の中心部においてこうした人物を招いての活動も展開するという思想的状況にあったのである。加えて，桐生高工に勤務する職工達が組織した「向上會」も修養を目的とした団体であり[48]，会員は上述の修養団講習会にも参加していた[49]。

さて，こうした修養団活動には単に桐生高工関係者ばかりでなく近在の外部者も多く参加している。例えば昭和2年6月18日の講習会には，桐生市内各方面の有力者を含め足利，伊勢崎からの参加者等250名，翌日には市内早起き会員二百数十人等の外部からの参加を含め総勢500名以上[50]，同年11月12日，13日の講習会には，市内の教育者，付近の中等学校教員，市内及び付近の修養団支部の最高幹部，桐生機械株式会社の団員全員，東洋織布会社の女子従業員等の外部からの参加者を含め総勢200名以上が参加するなど，当時の修養団運動は「近頃では事實上毛の野を風靡すと云う様な状態」[51]となっていたのである。さらにこうした修養団支部の活動は，地方紙である『上毛新聞』によって地域住民に対しても報道されていた[52]。

このような活動を展開した桐生高工の修養団支部であったが，こうした活動には附属商工専修学校の生徒達も参加していたのである[53]。

5. 附属補習学校の卒業生と桐生地方の修養主義 ―結論―

これまでみてきたような附属補習学校の教育理念のもと修養団活動にも参加しながら卒業した生徒たちの動向に注目したい。

具体的に同校卒業生の勤務地などをみてみると，たとえば昭和2年5月の時点で，第一回卒業生（大正12年3月卒業）から第五回卒業生（昭和2年3月卒業）の計225名のうち死亡した5名を除く220名中，桐生市内居住者184名，市外居住者36名と8割以上の卒業生が市内に居住している。職業別では，会社・工場等の工員が124名，自営が43名等[54]で過半数の卒業生が工員として働いているが，具体的な勤務先のデータの得られる第一回卒業生に限定してみると，色染科12名のうち勤務先不明の1名と隣町の小俣での勤務者1名以外全員が桐生市内勤務（うち自営6名），紡織科18名は全員桐生市内勤務（うち自営7名），機械科は26名中東京高工の1名以外は全て桐生市内勤務（うち自営4名），応用化学科1名は市内勤務という実態である。合計で57名の卒業者中54名が市内での自営（17名）または市内での工場や学校等での勤務者である。このように修養主義の理念に基づく教育を受けた同校の卒業生が桐生地方の産業を支える人材となっていく状況をとらえることができるが，特に注目したいのが機械科第一回卒業生26名のうち9名が桐生機械株式会社に勤務していることである[55]。

桐生機械株式会社では同社工員16名を附属工業補習学校第一期生として授業料会社負担で入学させている[56]。同社代表で附属工業補習学校評議委員の前原準一郎はこのように同校を積極的に利用しているのであるが，そうした桐生機械株式会社でも大正末期から修養団活動が活

発に展開され，昭和2年1月に全員入団，同年の天長節を期して修養団桐生機械支部を設置しており[57]，前掲の昭和2年6月18日，19日の講習会は，主催者である同社の代表者前原準一郎の相談を受けて桐生高工で開催された経緯があること[58]や，昭和2年11月12日，13日に桐生高工で開催された一夜講習会には桐生機械株式会社の全団員が参加していること[59]などにみられるように，修養団活動において同社と桐生高工との緊密な連携関係が指摘できるのである。そうした関係の中におかれた附属商工補習学校卒業生社員の大内幸一(大正14年商業科卒業 栃木県出身)は，昭和2年夏の母校への便りの中で，「(桐生機械株式会社の) 修養團も益々盛んで時々知名な方をおまねきして有益な講演をお願致してをります。」と語っている[60]。このように附属補習学校の卒業生が同社の社員として修養団活動に参加していくというかたちがみられることになるのである[61]。

以上，桐生高工附属工業補習学校の創設の背景，同校の教育理念，卒業生の就職状況とみてきたのであるが，ここまでの検討から桐生地方における修養主義の浸透に果たした同校の役割については次のようにとらえることができると考える。

まず同校設立に先立って地元雑誌に展開された職工・徒弟教育論において公徳心，品性，人格の向上の重要性がしばしば指摘されている。桐生は県内でも職工問題に関する関心が強い土地であったが，そうした論説の背景には桐生の産業の発展ひいては国家の生産能率の増進という問題が存在していた。さらに，同校の評議委員で「実業常識」担当者となった5人はいずれも桐生織物産業界の中枢を担っており，彼等は東京（高等）工業学校，東京高等商業学校という当時の代表的な実業教育機関の卒業生で，特に3人の東京（高）工卒業生は，手島校長のもとで学び，自らの経営する企業で修養主義的な教育ならびに修養団活動を展開した人たちでもあった。

一方，大正5年に授業を開始した桐生高染は地元産業界と緊密な連携関係を持っていたが[62]，桐生に着任した西田博太郎自身も無名会に入会し[63]，『書上タイムス』にも論説を掲載する[64]など附属補習学校の評議委員が中枢を担う桐生の機業界とのつながりは強かった。西田校長は桐生高工という官立高工の校長として国家主義的基盤に立って附属補習学校の教育を展開することになるが[65]，彼も桐生の機業界の実状について遺憾であるとの認識を持っており，その背景には，桐生高染初代校長大竹多気が「当地には随分青年を堕落せしむべき誘惑物が少なからぬやう認めらるゝ」[66]と新入生に注意を促したような桐生の土地柄の問題も存在していたのである。

こうして西田は，生徒たちに「人格を向上させ」「エラク出世し」「桐生の産業を起」こしていくことを説いたのであるが，そこには，個人の人格の向上による出世とその個人の働きによる桐生の産業の発展という論理の接合がみられるのである。

このようなかたちで修養主義的教育が展開された附属補習学校は，同校と桐生機業界の連携関係のなかで，卒業生の多くが同地で就業するという同校の特質によって，桐生地方への修養主義の浸透の一つのルートとして機能したといえるだろう。

註

1) 修養団運動八十年史編纂委員会編『修養団運動八十年史 概史』(財) 修養団 昭和60年37頁。
2) 筒井清忠『日本型「教養」の運命 歴史社会学的考察』岩波書店1995年18頁。
3) 拙稿「近代日本の資本主義と修養主義に関する一試論—群馬県桐生地方における企業内教育を事例として—」『仙台大学紀要』第29巻第1号1997年，同「明治後期の実業教育と修養主義—群馬県桐生町の地方雑誌にみる—」『仙台大学紀要』第29巻第2号1998年。
4) 桐生市教育史編さん委員会編『桐生市教育史 上

巻』桐生市教育委員会 昭和63年857～858頁。本論中では時期に応じてこれらの校名を適宜使い分けているが，各時期を一括して扱うときには「附属補習学校」の語を用いている。

5) 群馬大学工学部創立五十周年記念会編『群馬大学工学部五十年史』群馬大学 昭和40年408頁。本論で対象としている期間についてみると，昭和6年までの桐生高工の809名の卒業生のうち桐生において織物関係の業務に携わっている者は40名ほどにとどまっている。桐生高工時報編輯部『桐生高工時報』第69号（昭和6年7月10日発行）6頁。ちなみに同年までの附属補習学校の卒業生総数は402人である。群馬大学工学部75年史編纂委員会編『群馬大学工学部75年史』群馬大学工学部 平成2年807頁。

6) 『桐生高工時報』第6号（大正15年5月7日発行）6頁。

7) 『桐生高等工業學校附屬商工補習學校一覽』（発行年不明。但し，同書に掲載された生徒数などの統計は大正12年6月1日調となっているので，同年の発行と判断される。）5頁。

8) 同上39～45頁。

9) 前掲『群馬大学工学部五十年史』327頁。

10) 前掲『桐生高等工業學校附屬商工補習學校一覽』30頁。

11) 前掲拙稿。

12) 無名会の会員およびその活動については，拙稿「大正初期の地方高学歴層と地域社会―群馬県桐生町における中学校創設運動をめぐって―」『東北大学教育学部研究年報』第41集1993年。

13) 桐生高等工業學校編『桐生高等工業學校二十五年史』昭和17年636頁。

なお，書上商店は桐生における「第二代の買次王」と位置づけられる有力な商店である。桐生市史編纂委員会編『桐生市史 中巻』桐生市史刊行委員会 昭和34年625頁。

14) 大正6年度の税額でみると5名とも町内のほぼ上位一割に位置づけられる。桐生町役場『大正六年度戸数割等級表』。

15) 各年『桐生高等工業學校一覽』

16) 『無名會記録』大正3年5月21日。

17) 『無名會記録』大正3年12月2日，大正4年1月19日，11月21日，大正5年1月25日。

18) 町立桐生中學校『開校記念町立桐生中學校一覽』大正7年（県立桐生高等学校『桐生高校70周年記念誌』昭和63年に復刻掲載）44頁。

19) 『書上タイムス』第1巻第12号（明治44年12月5日発行）50頁。

20) 『書上タイムス』第2巻第1号（明治45年1月1日発行）6～11頁。

21) 『書上タイムス』第2巻第2号（明治45年2月5日発行）2～9頁。

22) 前掲拙稿1997年。

23) 『書上タイムス』第6巻第12号（大正5年12月5日発行）17～21頁，第7巻第1号（大正6年1月1日発行）19～25頁。

24) 『書上タイムス』第7巻第6号（大正6年6月5日発行）5～9頁。

25) 同上8～9頁。

26) 『書上タイムス』第7巻第7号（大正6年7月5日発行）42～43頁。

27) 筒井前掲書41頁。

28) 『書上タイムス』第10巻第2号（大正9年2月5日発行）33～34頁。

29) 『書上タイムス』第8巻第9号（大正7年9月5日発行）32～33頁。

30) 前掲『桐生市教育史 上巻』862頁。附属工業補習学校の8人の評議委員のうち，前出の5人以外は，桐生市長，桐生織物同業組合組長，桐生市会議員の3人であることもこの点と関連していると考えられる。各年『桐生高等工業學校一覽』。

31) 前掲『群馬大学工学部75年史』20頁。

32) 群馬大学工業会西田先生伝記編集委員会編『独澄庵西田博太郎先生伝』群馬大学工業会 昭和59年314～315頁。

33) 同上539頁。

34) 『桐生高工時報』第5号（大正15年4月10日発行）3頁。

35) 『桐生高工時報』第6号（大正15年5月7日発行）6頁。

36) 同上。

37) 同上。

38) 筒井前掲書165～167頁。

39) 神島二郎『近代日本の精神構造』岩波書店1961年84頁，竹内 洋『選抜社会』メディアファクトリー 1988年179～189頁。

40) 前掲の松井善作は，「（19名が卒業した）第二回紡織科卒の私どもは（中略），西田先生の期待に答(ママ)えて皆職場では責任のある立場にあった」と述べ，須田米吉（大正12年紡織科卒業 群馬県出身）は，のちの状況として「今は桐生産業界を左右する様な有力な卒業生も五十指を屈する程になって居る」と語っている。前掲『独澄庵西田博太郎先生伝』537，540頁。なお，松井善作は群馬

縫製(株)社長となった人物である。同書571頁。

41) 『桐生高工時報』第3号（大正15年2月5日発行）6頁。

42) 『桐生高工時報』第20号（昭和2年7月10日発行）2〜3, 13頁，第25号（昭和2年12月10日発行）1〜2頁，第37号（昭和3年12月10日発行）2頁，第43号（昭和4年6月10日発行）1, 12頁。

43) 『桐生高工時報』第34号（昭和3年9月10日発行）3頁。

44) 『桐生高工時報』第20号（昭和2年7月10日発行）13頁，第25号（昭和2年12月10日発行）2頁。

なお，西田は桐生高工以外で開催された修養団講演会にも参加しており，例えば昭和2年5月15日には「私は昨夕（中略）修養団の武内先生の有益なる講演を聞き（後略）」と在校生に語っている。『桐生高工時報』第19号（昭和2年6月10日発行）3頁。

ところで，西田が修養主義的な教育理念を持ち桐生高工へ修養団支部を開設するにあたっては，彼と修養団関係者の個人的関係が大きい意味を持っていたのではないかと考えられる。

『桐生高工時報』において西田は「五十年の回想」という半生記を10回に亘って連載しているが，そこに紹介された彼の経歴において修養団関係者との深いつながりが示されているのである。たとえば，山口高等学校生徒時代の保証人を後に修養団の賛助員となる同校校長の岡田良平に依頼しており，岡田との関係は卒業後も続いていること（『桐生高工時報』第16号 昭和2年3月10日発行2頁）。岡田の後任の校長北條時敬にも保証人を依頼しているが，被保証人仲間として修養団常務理事となる二木謙三（のちに昭和21年から団長）がおり，修養団桐生高工支部開設にあたっては発会式に二木が招かれていること（『桐生高工時報』第3号 大正15年2月5日6頁）。大学卒業後の文部省留学生時代に同じ英国に留学中の斎藤俊吉（のちの東京高工教授。東京高工は手島精一校長のもと修養団活動の一つの拠点ともいえる学校であった。）をしばしば訪問し，ヨーロッパ各地への旅行中にも行動をともにする機会を持っているが（『桐生高工時報』第19号 昭和2年6月10日発行2〜3頁，第20号 昭和2年7月10日発行2頁），斎藤は後の東京高工教授時代に，前出の金子竹太郎，前原悠一郎等が発行する修養主義的地方雑誌にも論説を掲載している人物であること（桐生社『織物工業』第114号 明治41年3月1日発行24〜25頁）。帰国後一旦は名古屋高工教授（色染科長）に就任しながらも懇請されて入社した日本セルロイド人造絹糸株式会社の社長がやはり後の修養団賛助員の近藤廉平（日本郵船社長）であったこと（『桐生高工時報』第22号 昭和2年9月10日発行2〜3頁）。

西田が修養主義的教育理念を持つに至ったことの背景として，こうした個人的な人間関係の影響も考えられるが，ここではその可能性を指摘するにとどめておきたい。

45) 前掲『桐生高等工業學校二十五年史』830〜835頁。

46) 同上832頁。

47) 筒井前掲書7頁。

48) 『桐生高等工業學校案内』（発行年不明であるが内容から昭和2年の発行と判断される。）34頁。

49) 『桐生高工時報』第20号（昭和2年7月10日発行）13頁，第25号（昭和2年12月10日発行）2頁。

50) 『桐生高工時報』第20号（昭和2年7月10日発行）13頁。

51) 『桐生高工時報』第25号（昭和2年12月10日発行）2頁。

52) 『上毛新聞』大正15年1月15日，昭和3年12月2日ほか。

53) 桐生高工では本来は生徒と呼ぶべき高工本校の在校生を「学生」，附属補習学校の在校生を「生徒」と呼び区別していたが（前掲『桐生高等工業學校二十五年史』635頁），修養団活動には「学生」ばかりでなく「生徒」も参加している様子が報じられている。『桐生高工時報』第25号（昭和2年12月10日発行）2頁。

54) 『桐生高等工業學校一覧 自昭和二年 至昭和三年』昭和3年18〜19頁。

55) 以上第一回卒業生については，前掲『桐生高等工業學校附屬商工補習學校一覧』46〜51頁。

56) 桐生機械社史編集委員会編『桐生機械社史』桐生機械株式会社 昭和56年271頁。

57) 同上45頁。

58) 『桐生高工時報』第20号（昭和2年7月10日発行）13頁。

59) 『桐生高工時報』第25号（昭和2年12月10日発行）2頁。

60) 『桐生高工時報』第21号（昭和2年8月10日発行）10頁。

61) 当時桐生機械株式会社の職長を務め同社への修養団活動導入に貢献した西原嘉一は，のちの昭和13年の時点では修養団桐生高工支部の副支部長となっていることも指摘しておきたい。前原準一郎『桐生機械株式會社經營の回顧と感謝』昭和17年34頁，前掲『修養団運動八十年史 資料編』94頁。

なお，他の学科も含めると附属工業補習学校第一回卒業生は，桐生機械株式会社9名，両毛整織株式会社4名，東洋織布株式会社2名，日本絹撚株式会社1名といった人数で，修養団活動あるいは修養主義教育を展開している大企業で就業している。前掲『桐生高等工業學校附屬商工補習學校一覧』46～51頁。

62) 拙稿「大正期の高等教育機関と地域社会—桐生高等工業学校の対地域社会機能—」『仙台大学紀要』第28巻第2号1997年。

63) 西田は桐生高染着任直後の大正5年3月21日に入会している。前掲『無名會記録』。

64) 『書上タイムス』第17巻第9号（昭和2年9月5日発行）17～22頁ほか。なお，同誌には附属補習学校に関する記事も掲載されている。同誌第13巻第4号（大正12年4月5日発行）6～7頁ほか。

65) 桐生高染時代に定められた五ヶ条の教育綱領の第一は，「教育に關する勅語並に戊申詔書の聖旨を奉體すべし」である。『書上タイムス』第6巻第5号（大正5年5月5日発行）38頁。

66) 同上37頁。

（平成10年10月20日受付，平成10年12月14日受理）